

令和3年(2021年)3月29日

研究開発完了報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

住所 北海道札幌市中央区北3条西7丁目

管理機関名 北海道教育委員会

代表者名 教育長 小玉 俊 宏

令和2年度(2020年度)地域との協働による高等学校教育改革推進事業に係る研究開発完了報告書を、下記により提出します。

記

1 事業の実施期間

令和2年(2020年)4月20日(契約締結日)～令和3年(2021年)3月31日

2 指定校名・類型

学校名 北海道登別明日中等教育学校

学校長名 志 知 芳 彦

類型 グローカル型

3 研究開発名

AKB Future Project 2nd Stage ～北海道と世界の明日を創る

4 研究開発概要

高齢化社会が進行する日本において、地域を活性化し、あらゆる年代が住みやすい環境を整えることが必要である。地域をフィールドとして、関係機関と連携し、社会課題の解決に向けた学びを深め、解決法を提案、実践することで、地域への理解や愛着が深まり、主体的に考え行動する力を身に付けた地域人材を育成する。

3回生の「世界と日本・北海道のつながり」を通してSDGsについて学習し、4回生以降の課題探究は、SDGsの視点と関連させて探究活動を進める。5～6回生では、課題探究の取組の深化を図るとともに、自己のキャリアデザインを確立させる。

5 学校設定教科・科目の開設、教育課程の特例の活用の有無

- ・学校設定教科・科目 開設していない
- ・教育課程の特例の活用 活用していない

6 運営指導委員会の体制

氏名	所属・職	備考
門倉 里博	北海道胆振総合振興局地域創生部地域政策課主査	
服部 仁	登別市役所総務部企画調整グループ総括主幹	
白鳥 金吾	北星学園大学短期大学部准教授	
山川 裕之	株式会社丸ヨ池内経営企画部長	
岩渕 啓介	北海道教育庁学校教育局高校教育課主査	管理機関担当者

活動日程・活動内容

活動日程	活動内容
令和2年11月27日	令和2年度 第1回運営指導委員会（書面会議） ・事業の概要について説明し共有を図る ・令和2年度上半期の活動を共有 ・これまでの活動実績の成果と課題の総括の説明
令和2年12月22日	活動に対する評価と意見の聴取 ・これまでの活動実績に対するアドバイスの聴取
令和3年3月	令和2年度 第2回運営指導委員会（書面会議） ・指導・助言に対する返答，改善策の実施状況報告

7 高等学校と地域との協働によるコンソーシアムの体制

機関名	機関の代表者名
北海道教育庁胆振教育局	教育支援課長 竹内 結美
北海道胆振総合振興局	地域政策課長 水井 啓介
登別市	総務部長 佐藤 紀清
登別市教育委員会	教育部長 堀井 貴之
登別市社会福祉協議会	地域福祉課長 坂本 大輔
登別商工会議所	専務理事 高田 明人
登別国際観光コンベンション協会	専務理事 大野 薫
室蘭工業大学	理事副学長 溝口 光男

活動日程・活動内容

活動日程	活動内容
令和2年 4月 1日	コンソーシアムを再組織
令和2年 12月10日	地域協働学習支援員との打ち合わせ ・令和2年度 第1回コンソーシアム会議について
令和2年 12月14日	令和2年度 第1回コンソーシアム会議 ・事業の概要について説明し共有を図る ・これまでの活動実績の成果と課題の総括 ・ワーキンググループ設置の検討
令和3年 2月27日	コンソーシアム・第1回ワーキンググループ会議 ・各機関・団体からの関連活動に関する情報提供 ・持続的なコンソーシアムの在り方について検討

8 カリキュラム開発専門家，海外交流アドバイザー，地域協働学習支援員

分類	氏名	所属・職	雇用形態
海外交流アドバイザー	明山 崇	株式会社 I S A 札幌支店	都度依頼・令和2年度は謝礼支払なし
地域協働学習支援員	高橋 敏夫	登別福音教会主任牧師	都度依頼・謝礼支払なし

活動日程・活動内容（海外交流アドバイザー）

海外オンラインプログラムを実施するに当たり、異文化理解やオーストラリアの教育事情などオンラインプログラムの事前準備に対する助言をいただいた。

実施日程・実施内容（地域協働支援員）

日 程	内 容
令和2年 12月10日	地域協働学習支援員との打ち合わせ ・令和2年度 第1回コンソーシアム会議について
令和2年 12月14日	令和2年度 第1回コンソーシアム会議 ・事業の概要について説明し共有を図る ・これまでの活動実績の成果と課題の総括 ・ワーキンググループ設置の検討

9 管理機関の取組・支援実績

(1) 実施日程

業務項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
コンソーシアム								第1回				
運営指導委員会								第1回				第2回

(2) 実績の説明

①管理機関（コンソーシアム含む）における主体的な取組について

- ・海外の高校との交流事業の展開など、ICTの環境を整備するとともに教員の加配を行った。
- ・第1回コンソーシアム会議において説明された、事業の概要、ロジックモデル及び今後のスケジュール等について共有を図った。
- ・第1回運営指導委員会（書面会議）において、事業の概要、令和2年度上半期の活動を説明するとともに、委員から意見を聴取し、本校の取組の改善充実を図った。
- ・総合的な探究の時間（地域課題探究、キャリア課題探究）の充実に向けた指導・助言を行った。
- ・グローバルな視野を醸成する取組（ICTを活用した海外の高等学校等との交流授業、海外フィールドワークなど）への指導・助言を行った。
- ・第2回運営指導委員会（書面会議）において、第1回で委員から助言された内容を踏まえ改善した取組等について説明するとともに、生徒が課題研究の成果等を発表している様子（動画）を視聴した。また、次年度の展望等について委員から意見を聴取し、本校の取組の改善充実を図ることとしている。

②事業終了後の自走を見据えた取組について

- ・本校と地域との連携，課題探究への活用については，AKB Future Project 委員会を中心に実践を進めており，事業終了後も継続できる見通しである。
- ・コンソーシアムに関しては，次年度以降の運用を通して，コンソーシアム体制の在り方の構築と改善を図るとともに，事業終了後においてもコンソーシアムの取組を継続することとしている。

③高等学校と地域の協働による取組に関する協定文書等の締結状況について

登別市及び登別市教育委員会と協定書締結済み。

10 研究開発の実績

(1) 実施日程

実施項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
4回生「総合的な探究の時間」における「地域課題探究」	1回		3回	2回	2回	2回	4回	3回	1回	1回	1回	5回
4回生「社会と情報」における「RESAS」活用							2回	2回	8回			
5回生「総合的な探究の時間」における「キャリア課題探究」	1回		1回	2回		3回	1回			2回	1回	3回
6回生「総合的な探究の時間」における「学びのプロジェクト」		1回	1回	3回	1回	3回	5回	3回	1回			

※4月中旬～5月の予定は新型コロナウイルスの影響により中止または延期

(2) 実績の説明

①研究開発の内容や地域課題研究の内容について

(ア) 総合的な学習の時間 対象：3回生（中学3年生相当）

- ・「世界と日本・北海道のつながり」において，持続可能な社会づくりの視点を育成し，次年度からの地域課題探究の基礎となる取組を実施した。

(イ) 地域課題探究 対象：4回生（高校1年生相当）

- ・総合的な探究の時間において，地域課題探究を実施した。
- ・社会と情報の時間において，データ活用や情報発信の手法を指導した。
- ・実地またはオンラインによる地域フィールドワークを実施した。
- ・地域の課題について，持続可能な社会の視点を持って学びを深め，課題解決のための方策を考え，感染リスクに配慮したうえで方策を実施した。
- ・他校生（札幌開成中等教育学校等）との課題探究交流を実施し，コミュニケーション能力や，課題探究についての考察等を深化させる。12月に実施予定であったが，新型コロナウイルス感染拡大を受け中止とし，3月中旬にオンライン上で実施した。
- ・地域協働学習実施支援員のコーディネートにより，生徒の探究テーマを踏まえて行政・

民間企業やNPOとの連携を広げた。

- ・生徒は、各自のテーマについてレポートを作成した。
 - ・コンソーシアムで連携している機関などから、講師を招き、講演会やワークショップなどを実施し、生徒の課題探究に関する助言や指導をいただく機会を設けた。
- (ウ) キャリア課題探究 対象：4回生後半～5回生（高校1年生～2年生相当）
- ・総合的な探究の時間において、キャリア課題探究を実施した。
 - ・4回生での課題探究の経験をもとに、各生徒のキャリアデザインをさらに促すため、各生徒が、自分の興味・関心などに基づいたテーマを設定した。
 - ・実地またはオンラインによる地域フィールドワークを実施した。
 - ・生徒は、各自のテーマについて英語によるレポートを作成した。
 - ・コンソーシアムで連携している機関などから、講師を招き、講演会やワークショップなどを実施し、生徒の課題探究に関する助言や指導をいただく機会を設けた。
- (エ) 総合的な学習の時間 対象：6回生（高校3年生相当）
- ・自分の将来及び卒業後の学びをプロジェクト化し、アクションプランを作成した。
 - ・これまでの探究活動を振り返り、世界や地域で活躍する自分を具体化した。

②地域との協働による探究的な学びを実現する学習内容の教育課程内における位置付け（各教科・科目や総合的な学習（探究）の時間、学校設定教科・科目等）

- (ア) 3回生（中学3年生相当）：総合的な学習の時間
- (イ) 4回生（高校1年生相当）：総合的な探究の時間、
社会と情報（情報収集、データ処理、情報発信）
- (ウ) 5回生（高校2年生相当）：総合的な探究の時間
- (エ) 6回生（高校3年生相当）：総合的な学習の時間

③地域との協働による探究的な学びを取り入れた各科目等における学習を相互に関連させ、教科等横断的な学習とする取組について

- (ア) 英数国：探究の基礎、探究リテラシーに関係する指導（スピーチ、討論、cinii）
- (イ) 世界との比較：地理歴史、公民、保健、家庭、情報で実施

④類型毎の趣旨に応じた取組について

- (ア) グローバルな視点を持ち、地域課題の解決を考える取組
- ・世界と日本・北海道のつながり（1月～3月、3回生全員）：SDGsについて分担して学習することで世界の課題と目標に関する知識を身に付ける。また、コンソーシアムの協力のもと、地域人材による校内ヒアリングを行い、地域の状況を知る。そのうえで、SDGsを地域課題と結びつけて考えるワークショップを実施した。
 - ・地域課題探究（4月～10月、4回生全員）：前年度末に学んだSDGsと地域に関する知識を踏まえ、地域課題を発見し解決策を探究する活動を実施した。地域でのフィールドワークを必須としていたが、新型コロナウイルスの流行状況を踏まえ、実地でできない場合は電話やオンラインで実施した。地域課題に対する当事者意識を涵養し、課題解決に向けた行動力の育成を図った。
 - ・キャリア課題探究（4回生10月～5回生、4～5回生全員）：5回生は前年度に生徒各自が設定したテーマを探究した。4回生は、10月までの地域課題探究を踏まえ、新たに設定したテーマで探究活動を開始した。テーマ設定の際「5つのユニット」により地域課題との関連を、SDGsにより世界の課題との関連の意識付けを図った。
- (イ) 外国語教育に関する取組
- ・地元小学校での英語授業実施（4回生全員）：教える側に立つことで、相手に配慮し理解しやすい説明をするよう意識付けを図った。
 - ・海外とのオンライン会議（後期課程全ての回生）：習得した英語を活用することで英語学習に対する意欲を喚起し、その場で応答や質問をまとめるコミュニケーションの即興

性を意識付けて活動を行った。

- ・英語による地域紹介及び観光案内動画作成（5回生全員）：英語科の授業の一環で実施した。これにより、地域及びその観光地について世界に紹介するというアウトカムが進捗した。
- ・課題探究のエッセイライティング（5回生全員）：海外見学旅行が実施できなかったため、キャリア課題探究の成果を英語でまとめてアカデミックスキルの基礎を身に付けることができた。グループワークやディスカッション、プレゼンテーション等今後の取組で身に付けてきた力を実践・表現する場につなげていくことが期待できる。
- ・イングリッシュデイ（5回生希望者）：海外からの留学生を交えることで多様性を尊重し、英語力の向上を図るとともに批判的思考を養う取組。新型コロナウイルス感染症の影響により計画通りに実施できなかったが、オンラインで短時間の交流を行った。プレゼンテーションやディスカッションを通じて身に付けた力を実践の場で生かすことができた。
- ・留学生受入：長期プログラム1カ国1名（トルコ1）

(ウ) フィールドワーク

- ・海外オンラインプログラム

日程	内容
令和2年12月15日 ～12月18日 5回生7名, オーストラリア	・オーストラリアの高校生と、お互いの伝統や文化についてプレゼンテーションするとともに、伝統や文化を比較しながらディスカッションするなどの交流活動を行った。また、実施後に、活動の様子をまとめたレポートを作成するとともに、交流時のプレゼンテーションスライドを活用して、オーストラリアの地域の伝統や文化について参加生徒が他の生徒に紹介することで、交流活動の成果を学校全体へ還元した。
令和3年 3月15日 ～ 3月19日 4～5回生20名, オーストラリア	・社会的または国際的なテーマを取り上げ、オーストラリア独自の政策及び取組や、その取組に伴って生じている課題について考える。また、それらの課題をもとに探究テーマを設定し、探究した結果を発表するとともにディスカッションを行い、新たな視点を見出すことができるよう進めている。今後は、活動レポートや探究活動の成果物作成に加え、オーストラリア独自の取組を英語の授業において発表する予定である。

- ・地域フィールドワーク

インターネットや文献調査、校内ヒアリング、伴走教員との面談による情報収集にもとづき生徒自身がフィールドワーク先を探した。この際、登別市役所や登別市社会福祉協議会などのコンソーシアム構成団体からも多くのフィールドワーク先を紹介いただいている。新型コロナウイルスの影響により7月までは実地でのフィールドワークを自粛し、調査については電話・メール・オンライン会議システムの活用などで代用した。

7月以降は、登別市市制50周年記念事業の一環である「Be Smile プロジェクト」に有志生徒21名が参画した。Be Smile プロジェクトにより実現した本校生徒の課題探究は次の通りである。

- ・中高生の自炊率を向上させる → 民放HTBの企画で考案した弁当を販売
- ・DanceでEarthをHappyに → 花火大会でのソーシャルディスタンス確保にダ

ンスを活用する社会実験

- ・ 工作で子どもの成長を促す → 植松努氏を招聘してのワークショップ
- ・ イベントによる地域振興 → 市内のテーマパークで開催された Be Smile FES の企画を複数提案し、当日も社会実験を実施
- ・ 本校での取組を発信する → 登別市広報への記事掲載
- ・ 演劇でコロナ下の未就学児を元気付ける → 演劇を断念したが、Be Smile プロジェクトの一環としてアニメ制作

⑤成果の普及方法・実績について

(ア) 課題探究に関する成果共有

- ・ 推薦総合型入試と探究（5/28 オンライン）：SGH課題探究を経験した生徒たちの進路実現と方法について情報を共有した。
- ・ ゆるいエデュケーションラボ（8/30 オンライン）：登別市との協働により企画が進んでいる「未知の駅プロジェクト」の事例を共有した。
- ・ No Maps（10/17 オンライン）：「学校改革の中心地は高校の普通科！注目の『探究の授業』とは？！」において本校の事例を共有した。
- ・ 探Q！RESAS（12/5 オンライン）：「社会と情報」の授業内で実施した RESAS の指導方法と成果について事例を共有した。
- ・ マイプロジェクト伴走者フォーラム（2/6, 2/13 オンライン）：4回生でSGHの課題探究を経験し、5回生で地域との協働事業の課題探究を経験した今年度の6回生の進路実現と方法について情報を共有した。
- ・ 桜美林大学高大連携協定校連絡会議（3/11 オンライン）：総合的な探究の時間の成果と大学入試への接続を考える研究会において、先進的な実践事例として本校の取組が紹介された。
- ・ 『「探究」への導き 2022』（3月発行予定、大学新聞社）：2020年創刊された同書の2021年版「探究ルポ」において紹介される予定である。
- ・ 『キャリアガイダンス』（5月発行予定、リクルート）：学校内外での「対話」を重視する実践例として取材を受けた。課題探究の設計だけでなく、「対話」そのものを探究した生徒も紹介される予定である。
- ・ グローバル人材育成教育学会 第6回北海道支部大会（2/27 オンライン）：昨年度まで実施してきた海外フィールドワークに加えて、今年度の海外オンラインプログラムや本校が取り組んできた多くの国際交流事業の取組とその成果について事例を紹介、共有した。

(イ) web サイトを活用した情報共有

- ・ 本校公式web サイト上に、本事業に関わるページを開設し、課題探究の実践に関する情報と使用した資料やテンプレートをアップしている。

11 目標の進捗状況、成果、評価

(1) アウトカム

アウトカム 項目	前年度	実績	目標
ふるさとや北海道について日本語や英語で世界の人に紹介できる	80.4%	68.8% △12.4	100%
諸外国の人々との交流、異文化や生活習慣を知ろうとする意欲が高まる	90.5%	91.0% +0.5	100%
将来地元での就業を希望する生徒（北海道内）	13.5%	81.3%	60%
※将来地元での就職も視野に入れている生徒（北海道内）	※73.6%	+7.7	
将来、地方創生に関わる仕事への就業を希望している生徒	24.3%	17.8%	50%

※将来、地方創生に関わる仕事への就業も視野に入れている生徒	※87.8%	△6.5 ※84.0%	
課題研究活動を通じて、地元への理解が深まる	83.8%	82.1% △1.7	80%
物事を考えるときに、必要なデータや情報を探ることができる	66.9%	73.0% +6.1	80%

- ・7月までは校外でのフィールドワークを禁止していたが、「地域への理解が深まった」と感じる生徒は前年度並みとなった。
- ・前年同様、地元での就業、地方創生に関わる仕事への就業を積極的に希望する生徒は少数である。しかし、道外での就職を希望しながら道内での就職も視野に入れる生徒は学年が進行するごとに高まる傾向にある。

(2) アウトプット

アウトプット 項目	前年度	実績	目標
課題研究に関する検討会議の開催回数 ・AKB委員会×9, 探究に関する校内研修×2	7回 (70%)	13回 (130%)	10回
課題研究に関する研究授業の実施回数	1回 (25%)	0回 (0%)	4回
先進校としての研究発表回数	4回 (80%)	8回 (160%)	5回
地域課題解決のための行動を起こした生徒 ※既存の企画への参加ではなく、自らプロジェクトを企画運営した生徒	13人 (43%)	38人 (127%)	30人
コンソーシアムの構成団体数	9団体 (128%)	8団体 (114%)	7団体
地域課題探究または発展的な実践に協働する地域の外部人材の参画状況	延べ95人 (633%)	延べ40人 (267%)	15人
コンソーシアムの活動回数 ・第一回コンソーシアム会議 (12/14) ・ワーキンググループによるワークショップ (2/27)	1回 (50%)	2回 (100%)	2回
海外からの旅行者への英語による観光案内ができる生徒数	95人 (271%)	75人 (214%)	35人

- ・外部人材の活用に関しては、コロナウイルス流行の影響を受けながらも、目標を上回ることができた。登別市市制50周年記念事業関連での協働が多かった。
- ・「地域課題解決のための行動を起こした生徒」は、主体的な課題探究の一環として生徒が主体的に企画・立案し大人を巻き込んだものを数値化しているため、令和元年度は43%の達成率にとどまった。2年目となる令和2年度は、生徒と地域との積極的な関わりが進展し、127%の達成率に届いている。前年度から継続する取組や、そこから派生する取組がある一方、新規の協働やオンラインでの取組も生まれている。
- ・コロナウイルス流行の中でも前向きに地域での探究を進める生徒がいる一方、多くの生徒の探究がコロナウイルス流行により制限されることとなった。特に、4回生の地域課題探究で実地での地域フィールドワークを経験した5回生には、意欲を減退させる生徒が多くみられた。以下は、同じ集団に対して課題探究への意欲を調査した結果である。
4回生：わくわく46, まあまあ23, しぶしぶ2, いやいや3 (令和元年10月)
5回生：わくわく19, まあまあ24, しぶしぶ13, いやいや16 (令和2年10月)
- ・6回生は、5回生より本事業の課題探究に取り組んだ学年である。(進学先など)卒業後の探究的な学びについても意欲を調査した。地域における課題探究や、6回生で実施した「学びの

プロジェクト」が一定の成果を挙げたものと思われる。

6回生：わくわく47，まあまあ23，しぶしぶ1，いやいや2

本校生徒が入賞した・選抜された外部イベント	結果
次世代リーダー養成塾	2名 選抜
第二回高校生インテリアデザインコンクール	特別審査員賞
道産食材使用おにぎりアイデアコンテスト	準大賞
全国ユース環境活動発表大会 北海道地方大会	協賛企業特別賞
English Camp in 北星 Online 2020	Hokusei Prize(最優秀賞) Technical Prize
全国高等学校グローバル探究オンライン発表会	英語部門：銀賞 日本語部門：銀賞
マイプロジェクトアワード2020 全国 Summit	出場（3月下旬）
Change Makers Awards	3組 予選通過
Makers University	1名 選抜

<添付資料>目標設定シート

12 次年度以降の課題及び改善点

(1) 課題探究におけるテーマ設定

- ・生徒の内発的動機から探究テーマを設定するため、「5つのユニット」やSDGsとの接続を後回しにしているが、そのため探究テーマと地域や世界との接続が弱い。
- ・上級生の探究テーマを引き継ぐ事例が発生したが、テーマ設定できない下級生が上級生のテーマを引き継いでしまうケースが複数あった。また、上級生も思い入れがないまま手放すケースが見られた。探究テーマを継続する場合は、上級生と下級生が一定期間協働して探究を進めるなど工夫する必要がある。
- ・生徒の内発的動機に基づくテーマ設定を重視する姿勢は継続するが、一方で4回生に主体的なテーマ設定や探究の深化が難しい生徒も散見された。これは昨年度までは見られなかった現象である。原因としては、コロナ禍により学校外の協力者を招いての校内ヒアリングを充分に行えなかったこと、校外フィールドワークが制限されオンラインや電話での経験にとどまったことが考えられる。校外の団体や人材との協働により、課題探究への意欲を高める設計であったが、今年度はそれをカバーしきれなかった。次年度は、ICTを活用して学校外との接続を進めるとともに、感染対策を十全に取った上で対面による地域協働を再開していきたい。

(2) コンソーシアム構築

- ・コンソーシアム構成団体は協力的であり、事業の内容や目的を共有することができたが、実働的な部分では前に進むことができていない。令和2年度後半より開始するワーキンググループの活動を定期的実施する。

(3) ロジックモデル

- ・本事業を経験した生徒が進学で成果を挙げるようになった。地域への効果（アウトカム）が将来のUターンや交流人口増加といった「遠い未来のこと」であったが、これに進学実績を加えることで近い未来の効果を視覚化する。
- ・地域と協働した探究活動がより活発化し、実際の事例を通してロジックモデルを説明できるようになってきた。しかし良い点のみならず、新型コロナウイルス流行の影響でロジックモデルが繋がらない部分も視覚化されたことから、活用とフィードバックを通して改善を進めるとともに、コロナで断絶したロジックモデルを再編することで本事業を実効的なものにしていきたい。

(4) 地域リーダーの育成

- ・令和元年度（2019年度）は「課題発見」に留まる探究が大部分であったが、今年度は実際に行動に移す生徒が増加してきた。地域の活動への参加を楽しむ生徒が徐々に増加している。
- ・新型コロナウイルス流行に伴う臨時休業期間に、ほとんどの生徒の探究が止まってしまった。地域で探究活動を実践するに当たり、必要に応じて学校が間に入ることになるが、臨時休業の期間には生徒も地域も何もできなくなってしまった。オンラインによる活動や、文献やインターネットによる調査など、同様の事態が出来た際に探究が止まらない仕組みを構築する。

(5) 海外フィールドワーク訪問先の変更

- ・4～5回生の海外オンラインプログラムを次年度も継続して実施する。実施予定時期を早めることで、6回生も対象とすることができ、英語でコミュニケーションをとることに加えてグローバルな問題の解決に興味を持っている生徒の意欲や関心を高めることができる。
- ・令和3年度（2021年度）はオンラインプログラムの種類を分けることで、異文化理解からアカデミックスキルの基礎を培うことまで生徒の実態に合わせて幅広く対応することができる。
- ・出生率の低下や少子高齢化といった問題に加えて観光重視の政策などは日本、そして北海道や登別という地域にも共通している。オンラインプログラム連携先との比較検討の成果を個々の課題探究に還元するとともに本校生徒にも還元していく。

(6) その他

- ・生徒の活動を実現するための財源確保が課題である。今年度に限っては、登別市市制50周年記念事業との連携による探究があったが、持続可能なものではない。基金の創設やクラウドファンディングの活用など、中高生の活動を経済面で支える仕組みがあるとよい。

【担当者】

担当課	学校教育局高校教育課	T E L	011-204-5764
氏 名	岩渕 啓介	F A X	011-232-1108
職 名	主査	e-mail	iwabuchi.keisuke@pref.hokkaido.lg.jp